

「最終段階にて」 29 分 1992 年 サハリン北部 ニブフ

あらすじ：

サハリン島北部に暮らすニブフは善意の人たちだった。お客には、実の兄弟の様に接し、敵を持つとは決して望まなかった。創造主タイフナドとの約束を守って自分たちと、その飼い犬に必要なだけしか、魚を取らず、狩にあたって欲張らなかつた。家を建てるのにも必要以上に木を切らなかつた。大地を鋭いもので傷つけたり、行ないや言葉で汚すこともしなかつた。祖先の決まりに従い、ニブフは熊の魂を山と森の神、ピル・ウィズングに送り返してきた。だが、ニブフの不幸は外からやって来た。「お兄さんの心遣い」という悲劇が... 社会学者や政治学者によると、ニブフは、西暦 2000 年にはその歴史を閉じるであろうと予測される、ソ連の民族の一つである。悲しいことに、我々はこの悲劇の目撃者になった。悲劇の主原因は、ニブフの伝統的な生活様式の強制的な剥奪であった。旧ソ連の野蛮な民族政策は、このエスニック・グループの運命を、「予測」のように完成させるのであろうか。

民族の現況：

この作品は、サハリン島北部のニブフ（ニヴフ、ロシア語の複数形からニヴヒと記すこともある。かつてはギリヤークと呼ばれていた）を記録しているが、サハリン島北部とその対岸の大陸部、アムール川下流域・河口部に居住する。漁撈・狩猟民だが、アイヌと共に清国と日本の交易の仲介者でもあった。ニブフ語は、近隣のアイヌ・ウィルタ・ウリチ・ナナイとは直接の関係がない固有の古い言語である。2010 年のロシア国勢調査で、総数 4652 人、うちサハリン州に 2253 人、2002 年国勢調査でハバロフスク地方に 2034 人としている。日本領だったサハリン島南部にも 100 人ほどのニブフがおり、戦後大部分が北海道に移住した。1960 年代には 8 世帯 30 人ほどいたというが、現在は詳細が不明。

作者について：

ラウレンティ・ソン 脚本家・映画監督・文学者

カザフスタンに強制移住させられたロシア極東沿海地方高麗人としてトルクシブ鉄道沿線の寒村、ウシトベで生まれ、首都アルマアタで少年時代を過ごし、1960 年代、全ソ国立映画大学脚本科に学んだ。当時より、岡田一男と学友であった。卒業後、カザフフィルム撮影所に配属され、脚本家となるが、後に監督として劇映画演出も手掛ける。1980 年代前半、先輩・同僚カザフ人のリベラルな言動を擁護した結果、撮影所を追われ、朝鮮人劇場の戯曲家、舞台監督として生き延びた。80 年代後半、子ども時代の思い出として強制移住を描いたロシア語の短編小説が、人気週刊誌「アガニョーク」に掲載され、全国的に知られるようになる。ペレストロイカ政策で規制が緩むと独立採算制プロダクション「君と僕」をカザフスタン作家同盟のもとに興し、それまで干されていた映画人を集め、不当に抑圧されてきた市民や民族に焦点を当てたドキュメンタリーを製作させた。ソ連崩壊期に「君と僕」は、彼の個人経営プロダクション、ソンシネマに改組された。1990 年秋にエストニア、パルヌでの映像人類学フェスティバルで岡田と 20 年ぶりに再会し、共同して日本の TV 政治情報、文化情報、自然誌番組等に取り組む。1992・94・99 年に来日。現在も執筆活動を行っている。

ヴァシリー・パルフォーノフ カメラマン・映画監督

ロシア極北、サハ共和国北部の総人口 1000 人を切ったトナカイ飼育・狩猟民ユカギール（ヴァドゥル）出身の映像作家。少年時代、遊牧キャンプに物資補給に飛んでくる飛行士に憧れると行政当局は、彼をウクライナの航空学校に送った。彼が映画に興味を移すと、モスクワの全ソ国立映画大学撮影科に押し込んだ。しかし、卒業後の彼に、映画産業の存在しない郷里に居場所はなく、中央アジアのキルギス・カザフスタンでニュースカメラマンとして生きることとなった。ラウレンティ・ソンが彼に注目し、幾つかの企画を提供し、カザフスタン東部のロシア旧教徒、自民族ユカギール等について取り組んだ後、サハリン北部で「最終段階にて」を制作した。92 年来日、この後、故郷サハ共和国に国営映画撮影所、サハフィルムの建設に招聘され、サハに帰った。しかし、長年の中央アジア暮らしに、極寒の地はあわず、カメラマンに致命的な眼球を痛めて挫折した。その後の消息は不明。